

大平さんの講演と英語

荻澤 嘉雄

大平さんを、私は、昭和十五年から存じ上げていた。当時、私は、東京商科大学学部^{まいたて}の二年生で、米谷隆三先生のゼミナールにいた。米谷先生は、一橋出身なのに法律学を志し、約款法の研究により、昭和三十年度学士院賞を授与されたお方で、ご実家は香川県にあつた。そこで、大平さんは、上田辰之助先生のゼミナリストンではあつたけれども、同郷のよしみで、学生時代から高円寺の米谷先生のお宅によくお見えになつていた。

米谷隆三先生のお宅でご紹介いただく

たまたま、昭和十五年に、大平さんが、内蒙古の張家口にあつた興亜院蒙疆連絡部の経済課長から日本に帰つて興亜院經濟部第二課におられたとき、米谷先生のお宅で先生からご紹介いただいた。その前から、米谷先生は、「大蔵省には大平がおるぞ。大物だ。将来、必ずえらくなる。お前たちも大平のようになれ」と、われわれに言つておられたので、ご紹介いただいて大変嬉しかったことを憶えている。

当時から私は、米谷ゼミの会である、「隆門会」の幹事をしていたので、米谷先生のご命令で大平さんの御帰国祝いを兼ねて隆門会を如水会館で開いた。大平さんは、喜んでご出席になり、隆門会の特別会員になつてくださった。

それから時代は暗転して翌昭和十六年十二月、日米開戦となり、私は繰り上げ卒業の第一号として十二月に学園を追い出され、十七年二月に金沢に入隊、四年近く軍隊生活を送った。幸い、ずっと内地勤務で、終戦にともない、二十年八月三十一日に郷里の信州小諸に帰り、翌二十一年、日本経済新聞に入社し、外務省とGHQ（連合国総司令部）を担当した。

昭和二十三年の春、米谷先生が、「お前の高円寺の家で隆門会を開け。大平から酒の配給切符をもらってこい」とおっしゃるので、当時、四谷にあった大蔵省の給与第三課長をしておられた大平さんのところへ伺った。そして、あのころは物資がひどく不足していて、酒の配給切符は非常に貴重だったので、恐る恐るお願いした。大平さんは、「先生はお元気にしていらっしゃるか。くれぐれもよろしくお伝えしてくれ。その日は都合がつかず出席できないが、酒はどのくらいほしいか」といわれた。私が遠慮して、「一升いただければ……」と答えると、「それでは足らんだらう。二升上げよ」と実に気前よく出してくださった。当時は今では全然想像もできないほど日本中がケチになっていたので、実は断わられるのではないかと心配していたのに、こちらの希望の倍もくださったのである。流石に、米谷先生がおっしゃる通りの大物だと思った。そのときの隆門会が盛り上ったことはいつまでもない。

翌昭和二十四年六月、米谷先生から私に、「次回の隆門会は大平の家で開くように。大平と話についている」というお話があった。当時は安い会費で開ける会場はなかったもので、喜んで使わせていただいた。駒込林町にあった大平邸は、敷地千数百坪、冠木門の凄く立派なお屋敷。その大広間を会場にして飲み、かつ語り合った。このときは、大平さんが、池田大蔵大臣の秘書官になられた直後なので、その間のあの有名ないきさつや心境などを私たちにお話くださった。このとき、美しくて優しくて生まれのままの純な志げ子夫人にお目にかかり、それ以来、筆舌に盡くしがたいほどよくしていただいた。

こういうことであり、また、大平さんを後援する一橋出身有力財界人の集いである「大平会」の創設者、

弁護士の松本正雄先生（のちの最高裁判事）は私と家内のご媒酌人なので、私は政治部記者ではなかったけれども、大平さんにはよくお会いできた。昭和四十五年八月には、大平さんに軽井沢の別荘から私の小諸の実家にお越しいただいたこともある。このとき色紙に揮毫をお願いした。快く「進退問天 栄辱従命」とお書きくださった。次の総裁選に出馬する決意と私は受け取った。

かつぶしのよつに味が出る講演内容

このような間柄なので、私は、日経の初代ロンドン特派員、論説委員から経済同友会の事務局次長を経て、昭和四十五年六月から世界経済研究協会の事務局をあずかっているが、大平さんが田中内閣の外務大臣のときと、自由民主党の幹事長のときの二回も、私どもの協会での講演をおねだりした。普通は、私もクラスの協会では、外務大臣や幹事長の講演はむずかしいのであるが、大平さんのご意向と森田一さんや真鍋賢二さんのご配慮ですべてスムーズにいき、講演は実現した。

外務大臣のときの講演は、昭和四十七年八月十日、東京丸の内のパレス・ホテルで行われた。大平さんは、七月七日に就任されたばかりで、これは外務大臣就任以来、最初の講演であった。田中内閣のナンバ・ツいで、しかも外政はまかされている「時の人」が、初めてその考えをまとまったかたちで明らかにするといつので、会場には、水上達三三井物産相談役（世界経済研究協会会長）、宇佐美洵日銀総裁ら経済界のトップ、中堅幹部、言論人が三百名以上集まり、大盛会であった。

また、幹事長のときの講演は、六年後の昭和五十三年二月六日、やはりパレス・ホテルで行われた。大平さんは、次期総理の呼び声が高かった上に、この年の元旦から日本経済新聞の「私の履歴書」を一カ月にわたって連載した直後であったので、この講演も注目を集め、会場には、水上達三三井物産相談役、大槻文平三菱鉱業セメント会長ら経済界のトップ、中堅幹部、言論人が前回を遥かに上回る五百名以上集ま

り、超満員の大盛況であった。

講演の題は、外務大臣のときは「現在の世界情勢と日本」、また幹事長のときは「内外情勢に思う」であったが、どちらの場合も、大平さんは原稿なしで、自分の言葉で語られた。その全文が、私どもの協会の月刊理論誌『世界経済評論』の、前者のは昭和四十七年十月号に、また後者のは昭和五十三年四月号にそれぞれ掲載されたが、いずれも今読んでも新鮮で面白い。

外務大臣のときは、主として日米関係と日中関係について、また、幹事長のときは、日米経済協議と日本の政治を中心に、それぞれ話された。その内容について特に関心の向きは、『世界経済評論』の該当号をお読みいただきたいが、これらのメイン・テーマの話のあと、大平さんは、経済大国になった日本、日本人はこれからどのような考え方で国際国家、国際人として生きていったらいいかについて、ユーモアをまじえながら率直に語られた。そこには大平さんの物の考え方やお人柄がよく現われているので、その部分だけを次に紹介しよう。

大平外相は、「日本の経済力がここまで大きくなったのは喜ばしいことですが、同時に、これからの日本の立場は、世界に対する責任が重くなり、大変しんどいことになるのではないでしょうが。……これからはわれわれは、みずからの姿勢を世界的な視野からもう一ぺん見直して、日本が本当の国際社会の一員としてちゃんとした姿になっているかどうかを考える必要があるという感じがしてならない」と述べ、続いて、「ところが、日本人というのは、そんなことを言いましたも、国際的ではない民族だと思つてございませう。大体、ことばは下手だし、愛想はよくないし、足は短いし、これはどうにも救いようのない民族のようです。(笑い) 私が外務大臣をやるぐらいの国ですから(爆笑)、しれたものでございませう。しかし、これを急にスマートな国際人に仕立て上げようといつても、それはとても不可能だろうと思ひます。これは容易ならん大事業であるうと思ひます。」「そこで、そんな柄にも合はん野望はもつてもたないで、日

本らしいいき方がないものかということ、しみじみ私は考えておるのであります。それは何かといいますと、結局、スマートであるかないかという物指しではなくて、信頼できるかできないかという物指しではかつて、日本は信頼できる一員であるということにならなければならぬし、また、そうなるのではないかと思えます。……信頼できる、ということとは、一口で言うと「イエス」と「ノー」をはっきりさせることだと思えます。できないことまで「イエス、イエス」と言っていたらいけないのです。外国人と会いましたとき、よく、「オー・イエス、オー・イエス」と言ってニタニタ笑っている方がいますが（笑い）、あれは一番よくないと思うのでございます。」と語った。

他方、大平幹事長は「もっとも、お互い足は短いし、外国語は下手だし、エチケット、マナーにはあまり完熟しておりません。いわば非常に国際的でない民族だと思えます。しかし、外国語が上手だとか、いろいろいなマナーに得手でおるとか、外国に大勢お友達があるとかいうことも大事でございますが、それ以上に、世界の立場でみずからの立場を見て、なすべきこと、なすべからざることをちゃんと心得るのが本当の国際人だと思うのでございます。われわれは、そういう国際人にはなれるはずでございます。最近、「文化危機」、つまり外国との交渉において、経済や政治の問題ばかりではなく、根本に文化的な摩擦があるのではないかという指摘が多くなつてまいりました。たしかにそうなのでして、生活全体で国際問題を受けとめていくという修練を、お互いに積み重ねなければならぬ時期がきておるのではなからうかという感じがするのであります。」と述べた。

外務大臣のときのも、幹事長のときのも、どちらも、かつぶしのように、噛めば噛むほど味が出る内容である。

ところで、これら二つの講演は、おききしているときには、「アー、ウー」が入るので、失礼ながら、時には眠くなることもあった。ところが、一週間後にできてきた速記を読んで私は驚いた。速記には「ア

「、ウー」は入っていないからすらすら読めて、私は「ウーン」とうなってしまった。

通常は、この種の講演は、あとで速記を直すのが大変な仕事なのである。私どもの協会では、年に十回ほど、会員会社へのサーブिसのため講演会を開き、そのオフレコの部分を除いた全文を『世界経済評論』に掲載しているが、講師によつては、きいているときには面白おかしくても、速記になったのを見るとひどいが多く、とてもそのままでは活字にできないのが少なくない。中には、私が黒鉛筆でちゃんとした文章に直しているうちに、ほとんど真黒になってしまつたのさえある。

ところが、大平さんの講演速記は、びんとして威厳があり、ちゃんとした文章になっていて、私などが手を加える余地は全然ないのである！ そのまま活字にできるのである。これには全く頭がさがった。大平さんは、「アー、ウー」を入れてる間に、言葉を選び、きちんとした文章にして話しておられるのである。田中角栄元総理が、「国会答弁は大平のが一番いい」と言われたのもむべなるかなである。これら二回の大平さんの講演の次の週の週末には、私は、講演の速記の直しという大仕事から解放されてのんびりできたことを憶えている。

上田辰之助先生ゆずりの英語での思考力

しかも、よく読んでみると、大平さんの講演速記は、そのまま英語に訳せるのである！ 日本語と日本人の思考は、とかくあいまいなところが少なくなく、講演そのままでは英語にならぬことが多い。ところが、大平さんのはちゃんとそのまま英語になるのである。

大平さんは、さきにふれた日経の『私の履歴書』の中で、一橋時代のゼミナルの恩師、上田辰之助先生について「上田先生は、経済学者というよりも、むしろ社会学者であり、社会学者である前に実のところ言語学者であられた。したがって、先生のトマス・アクイナスの研究その他のお仕事も、その言語学的

な素養を抜きにしては考えられないものであった。ゼミナールは、たいてい吉祥寺の先生のお宅で行われた。R・H・トニーの『獲得社会』をテキストとして、彼の経済思想をというよりは、トニーの英文自体の言語社会学的な解明を教わった。……」と記しておられる。

これで解った。上田辰之助先生は、トマス・アクイナスや西欧の社会・経済思想史研究の権威であられたが、同時に、「語学の天才」といわれたお方で、英、独、佛語はもとよりラテン語までよくされた。その上田先生にトニーの英文の言語社会学的な解明を教えていただいた大平さんは、英語が非常にお出来になったのである。そうでなければ、上田先生のゼミナールについていけないはずはない。また、したがって、西欧的な思考方法、物の考え方、表現のし方を身につけられたのである。英語を話すことはあまり得意ではなかったかもしれないが、英語で考える、英語で書くことは非常にお出来になったのだと思つ。

その上に、もう一つ私が吃驚させられたことがある。大平さんの方から、「活字になる前に速記を見た」とおっしゃるのである。私どもの『世界経済評論』に大平さんの講演がどのように載ろうと、天下の大勢にそう影響はなさそうに思えるのだが、しかし、大平さんは、速記をご覧になって、みずから数力所手を入れられた。自分の言ったこと、自分の発言には責任をもつという精神が強烈なのである。

とかく日本の政治家には、前言を翻したり、あるいは曖昧な表現で逃げたりする人が少なくない。そういう中であつて、大平さんは正に群鷄の一鶴であつたと言つていい。いまご在世であれば、もちろん政治の表舞台からは退かれておられるであろうが、そのお人柄と哲学で千鈞の重みをもつて政界ににらみをかきかせ、日本の政界の水準を高めるのに大きな貢献をされているにちがいない。志半ばにしてなくなられたのは痛恨に堪えない。